



# 滝田医院ニュース

022-0001 岩手県大船渡市末崎町字細浦77番地 滝田医院  
電話0192(29)3108 内科・循環器科・消化器科・呼吸器科

日本内科学会認定総合内科専門医・日本循環器学会認定循環器専門医 滝田 有  
**第19号** 発行日 2009(平成21)年5月25日

## 開業6周年を迎えて～この6年を振り返る～

### 目次:

開業からの歩み	1面
糖尿病アカデミー	1面
気仙人のための… (第3回)	2面
循環器学会 報告	2面
新型インフル。	2面

2003(平成15)年に開業してから、この4月1日で6周年を迎えました。患者さんも末崎町内のみならず、広く気仙一帯や宮城県からも来てもらえるようになりました。お陰さまで職員も採用時から一人も欠けることなく7年目を迎えることが出来ました。医師も自らの病気を乗り越え、今後も地域医療に微力ながら貢献していきたいと思えます。何卒宜しくお願いします。

### ～開業からの6年間の歩み～

#### 2003(平成15)年

4月1日 開業。大船渡市学校医、保健医、保育園嘱託医に任命。

8月 大船渡市福祉事務所属託医に委嘱。

#### 2004(平成16)年

3月 院内案内パンフレット作成。上部消化管内視鏡(胃カメラ)2台目を導入。当時は気仙管内で最も細い内視鏡だった。

4月1日 院内広報「滝田医院ニュース」(当紙)第1号発行。

10月 気管支喘息の患者さんに吸入指導を開始。

#### 2005(平成17)年

1月 産業医に認定。

4月 気仙広域連合介護認定審査会委員に任命。

11月 待合室に空気清浄機を導入。

12月 日本内科学会認定内科専門医(現・総合内科専門医)に認定される。気仙管内では唯一人。

#### 2006(平成18)年

4月 気仙医師会理事に選任。(広報部長となる)

#### 2007(平成19)年

4月 県立大船渡病院医療体制充実対策協議会幹事に任命。

#### 2008(平成20)年

1月4日 電子カルテを導入。

1月9日 クモ膜下出血で倒れる。休診中は東北大学循環器内科の大学院医師に応援診療してもらう。

4月 病床から立候補し、医師会理事再任。

6月5日 診療再開。予約制を導入。

9月11日 未破裂脳動脈瘤に対して手術を受ける。

10月21日 診療を本格再開。

#### 2009(平成21)年

4月 糖尿病の患者さんに、インスリン注射の当院での導入を開始。

5月 大船渡市の地域医療体制検討会委員に委嘱。

5, 6月の診療日程については  
院内の掲示をご覧ください。  
月曜日、土曜日で臨時休診が  
ありますのでご注意下さい。

## 順天堂糖尿病アカデミーに参加す。



第8期 順天堂糖尿病アカデミー

糖尿病が増えています。統計によれば日本全国で1600万人の患者さんもしくは予備軍の人が居るそうです。40歳以上の限れば全国民の数人に1人が糖尿病という勘定になります。当院に心臓病や高血圧で通院している患者さんの中にも、次第に糖尿病傾向が見られるようになる例が非常に多くなっています。このような状況で、糖尿病の専門医にばかり専門的な治療を委ねる訳には行かなくなりました。ところが当院の医師の糖尿病に関する知識は20数年前の初期研修時代に学んだもので、古くなって時代のニーズに合わなくなっていました。

この状況を打破するために今年の2月7～8日の2日間、東京で糖尿病の勉強をしてきましたので報告します。第8回を迎える「順天堂糖尿病アカデミー」

という研修に参加しました。北海道から沖縄まで全国の開業医45名が集まりました。順天堂大学の糖尿病専門医の講義を受けたり、自己血糖測定やインスリン注射体験などの実地もありました。糖尿病食も体験しました。非常に勉強になりましたし、他の開業医や専門医と実のある意見交換も出来ました。特に北海道の漁村で開業する先生からは、「漁師の人たちは腹が減るとアンパンなどを食べてしまうので糖尿病の食事指導は大変難しい。」というどこかで聞いたような話がありました。

この研修で得た成果を皆様に還元すべく、食事療法についてもインスリンの導入についても、新機軸を打ち出してお役に立ちたいと考えています。

## 気仙人のための、上手に医者にかかる方法(第三回)

診察のとき、医者は患者さんと世間話をする訳ではありません。もっとも、患者さんをリラックスさせるために世間話をすることもあります。

基本的には病名を決めること(診断)と治療方針を決めること、更にはその病気の悪化や再発を防ぐための生活上の注意点を伝えることが大半です。これを問診(もんしん)と言います。ところが気仙の人たちはこの問診をうまく受けることが苦手のようです。そのために間違った診断をつけられたり、治療方針が誤っていたり、再発や悪化してしまうことが少なくないように思われます。

例えば風邪で診察をうけた場合、主な症状(主訴と言います。)が喉の痛みだったとします。そのほかの症状はないか、あるいは風邪以外の病気ではないか?と思ひ「鼻水はないか?」とか「咳はでないか?」などと医者は問診します。(こ

れを鑑別診断と言います。)そうすると「いや、俺は喉が痛いのだ」と答える患者さんが非常に多いこと!自分の主訴が医者への伝わっていないと思うのか、主訴だけを強く訴える人が多いようです。また発熱の場合は大体、水分を多く摂る様に勧めます。これは脱水状態を避け、早い回復を促すための意味があります。しかし気仙の人は「水分なら充分摂っていたのだが」と見当違いの事を言います。何も病気の犯人探しをしているのではなく責任追及しているわけでもありません。今後はこうして欲しいということを行っているのです。

また、医者の言葉をささげって自分の話を始める人も多く見られます。医者は短い診療時間の中で出来るだけ患者さんの役に立つようにお話しようと思っています。世間話ではない病気のプロからの助言だと思って耳を傾けて欲しいのです。



### 3年ぶりに日本循環器学会に出席。

去る3月20日から3日間の日程で大阪国際会議場とリーガロイヤルホテルを主会場に、第73回日本循環器学会学術集会が開催されました。一昨年は多忙のため、昨年はまだ病床に在ったために、二年続けて出席を見合わせました。しかし気仙管内では「循環器専門医」の資格は当院医師と県病循環器科の科長医師と2人だけの状況です。(詳細は日本循環器学会のホームページを参照。)

このような専門医の資格を維持するために出席が必要となっています。当院も臨時休診となり、皆さんにご迷惑をお掛けしましたがご了承下さい。年々規模が大きくなり今回も一

万数千人が集まりました。

CKD(慢性腎臓病)が注目を浴びており、「心・腎連関」(心臓と腎臓の関連性)をテーマにした演題が目立ちました。教育セッションでは抗血栓療法(血液をサラサラにする治療)について聴きました。脳梗塞の予防にはワーファリン投与が有効である事を再認識しました。世の中の流れで今時の学会も優雅ではありません。昔は医者が息抜きをする口実でしたが、今は心底「生涯学習の場」になっています。医師の免許更新制度が取り沙汰されていますが、学会認定の専門医は実質、毎年免許更新と同じレベルで勉強しています。



当院正面

## 診察室から

新型インフルエンザで世の中大騒ぎです。関西のみならず、とうとう首都圏でも感染者が出ました。早晚東北地方にも感染者が出ることでしょう。

それにしても騒ぎすぎだと思いませんか? 基本的には、致死的な感染症ではなく、self-limited(自然に治癒する)な病気なのです。数年前に中国で流行したSARS(サーズ)とは訳が違います。また致死率の高い強毒性の鳥インフルエンザでもありません。空港での検疫風景や感染者が入院した病院の前から生中継する必要があるのでしょ

うから油断できないという論法もあるようですが、それなら季節性のインフルエンザと同じことです。お役所が決めた体制も、本来は鳥インフル由来の「新型インフル」を想定して作ったものです。それを今回の豚インフルに使っている

ので混乱しているのではありませんか? 夜中に大臣が緊急会見したり、学校の校長が責任を感じて涙を流したり、大袈裟すぎませんか? 「パニックにならないように!」と呼びかける側がパニックを既に起こしているのです。皆、マスメディアが恐くてアリバイ作りを